幾つかの感慨

詩人
美術評論家
柴　橋　伴　夫

道彩会が、第40回記念展を迎えること、心よりお祝い申し上げます。毎年開催されている展覧会を拝見させていただき、存在価値を高めていることを実感しています。そして道内の絵画史において、確実に1つの歴史を築きつつあると実感しています。なぜそう感じるのか少しのべておきます。そう考えるのは、水彩画を1つのジャンルに留めることなく、つねに絵画作品として意識しているからです。とかく日本では、水彩画というとタブロー作品よりやや下位とみる傾向があります。それではいけない、と思います。あくまでタブロー、水彩画、版画などは便宜的な区分です。むしろそこで問われるのは「作品の質」です。

ではこの「作品の質」を決めるのはどんなものでしょうか。いろいろ考えられます。造形思考の斬新さ、フォルムや色彩の妙、題材の新規さなどが挙げることができます。その中でも私が強調したいのが、造形思考の斬新さです。ここで私が思い起こしたい、ある画家の言葉があります。長く北海道の美術に新しい血を注いでくれた小谷博貞のものです。こんな摩周湖の美しさをめぐる話です。摩周湖は万人が美しいと思っている。ただ画家がどう美しく感じたのか分からない絵が多い。湖を美しいと感じるのは、〈美しさが湖のもの〉と考えるが、ここで強調したいのは美しいのは湖のものであると同時に、〈美しいと感じる画家〉のものであるというのです。つまり一番大事なのは、画家自身が美しいと感受したものに根差して描くべきだということ。なかなか奥の深い、「美とは何か」を問う示唆に富む話です。

紙幅の関係で、私見となりますが、会のさらなる発展を願いつつ、今後の課題について少々言及させていただきます。アトランダムに提示します。古くて新しい課題ですが、北の風土に根差した水彩画をどう作りだしていくか。これは会のアイデンティティにも関わります。先にも触れましたが自らの造形思考を見出し、個性的な水彩空間を描いていくこと。そこでは長いスタンスでの到達目標を持つことが必要になると思います。最後に自然風景や花、室内や日常空間だけでなく、人物・人間や社会的事象を内包する画題、さらに高度な抽象系の空間も追及してほしいと願っています。さらに道内美術界において存在感を増しながら、大きなうねりを造りだしてください。